

# 「まち1986」ダイジェスト

地域社会研究会作業部会

- 「まち1986」ダイジェスト
- 「まち1986」から言えること
- 「まち1986」とは何だったのか

企画財政局都市科学研究室では、地域社会と行政の現状と問題を掘り下げ、地域活性化の条件・課題について明らかにするため、学識経験者と区役所職員（区政推進課・市民課・福祉課）を中心に五十八年度から三年間にかけて「地域社会研究会」を設置して検討を進めてきた。その結果、市職員が「地域」の

実情を十分に把握していないことがわかり、まず、それぞれの地域が決して画一的でなく生き生きと活動している姿を忠実に描くことから始めた。そして、地域の活力の源泉に、できる限り迫ってみた。その結果を一冊にまとめた報告書が「まち1986 地域の活力と行政」である。

## 旭区希望が丘・

環境——駅を中心に広がるベッドタウン  
 歴史——昭和二十三年の鉄道開通から宅地開発へ  
 自治会・町内会——運営には各種団体も参加して  
 各種団体・自主活動——福祉に重点をおいた活動へ  
 施設——人気集まる住民たちの「広場」  
 まとめ——一歩先を見る活動をめざして

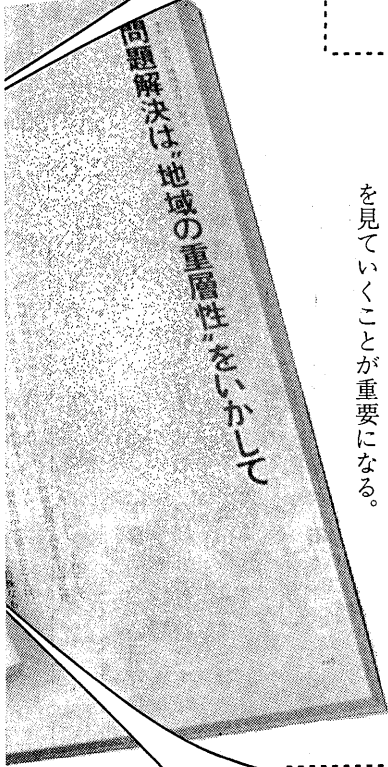
三年間にわたる調査・研究の成果は、「地域の重層的構造」という言葉に集約される。これこそ地域の活力、問題解決を呼びおこすものである。今後、市内の各地域において、重層的構造のあり方を見ていくことが重要になる。

## 戸塚区千寿・

環境——人口変化のない水田と工場のまち  
 歴史——昭和十四年、鎌倉郡から横浜市へ  
 自治会・町内会——分区に揺れる地元意識  
 各種団体——分区後、より充実した組織をめざして  
 自主活動——問題意識をいかに浸透させるか  
 施設——豊かな自然環境をいかして  
 まとめ——活性化は「地付き」と「転入者」の交流から

## ■第一部では…

「今日の横浜における地域の活力は…」というタイトルで、横浜市立大学の越智昇教授が、全体の序論を展開



開した。越智教授は、学識経験者として三年間、地域社会研究会に参加した。

【要旨】地域の活力は、地域がどのレベルであっても市民が主体的に営む活動に根ざすものである。これを横浜という都市化の進んだ地域の活動で見れば、住民の自由な行動を活性化させる組織、そこで自分たちで自主的に活動したり催しを実施するおもしろさの発見それに取り組むボランティアが、重要な活力のフアクターになる。

### 保土ヶ谷区西谷・

環境——昼間人口の少ないまち

歴史——人口急増のピークは昭和三十五年から十年間

自治会・町内会——きめ細かな活動をめざして

各種団体——「隣り同士の会話」復活を求めて

施設——「活性化」への施設づくりを模索

まとめ——「地区センター建設」に期待

### 港南区港南台・

環境——突然出現した大規模団地のまち

歴史——小さな農村と山林地帯が姿を変えた

自治会・町内会——新住民の交流に力を入れる

各種団体——見知らぬ同士でも一緒に楽しもう

自主活動——得意分野をいかした心のふるさと作り

施設——公共施設建設は全住民の関心事

まとめ——開発後十年、街づくりへの視野ひろがって

### 南区別所・

環境——繁華街から山ひとつ離れたまち

歴史——のどかな農村地帯が昭和三十年代に変貌

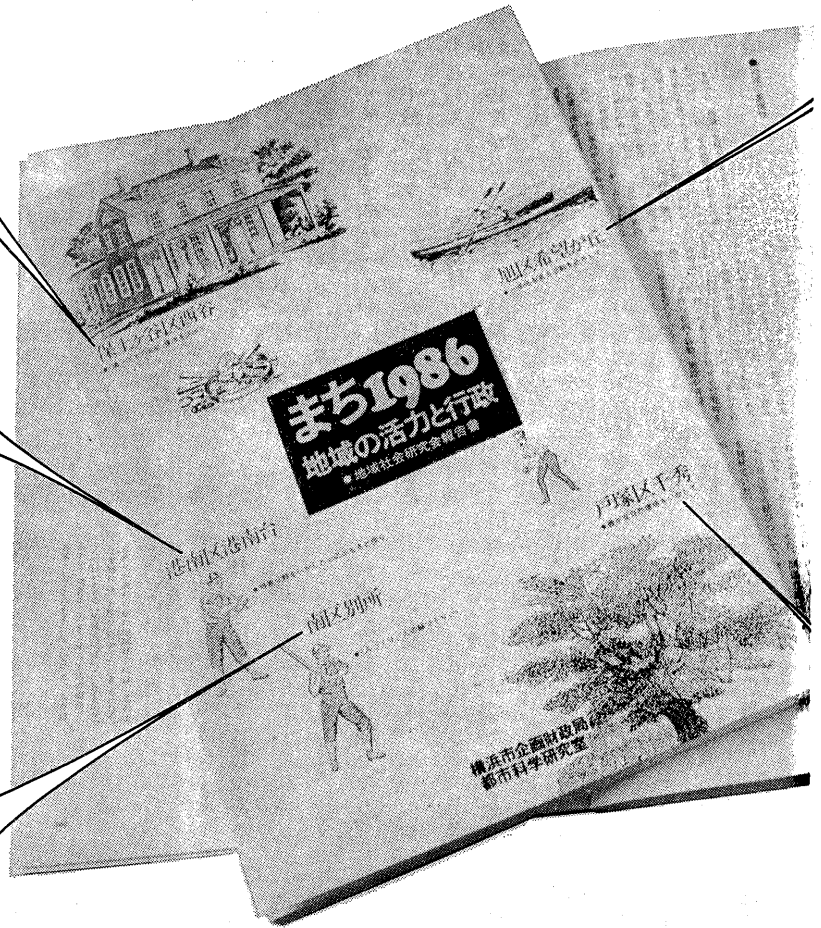
自治会・町内会——南区最大の町内会に発展

各種団体——もっと住民同士の交流を

自主活動——子供たちの心を育てたい

施設——少ない市民利用施設

まとめ——「人づくり」「人の輪づくり」へ



## ■ 第II部では…

市内の五地区をサンプルに選んで、作業部会のメンバーが実際に地域に入って調査し、活動の様子をできるだけ具体的に記述した。このページに示した各地区の概要は「まち1986」の目次から抜粋したものであるが、それぞれの項目についてかなり詳細な記述をしている。各地域の特徴を出しているとともに、調査にあたった作業部会員とそれぞれの地域との「出会い」のドキュメントとしても面白い。量的に見ても「まち1986」の総ページ数の半分以上を第II部に費している。

### ● 第三部では

第二部でとりあげた五地域を中心に、地域の現状を、地域組織・地域施設・地域情報の面から整理し、行政が行っている施策との対比をしてみた。

#### 【要旨】

・地域組織（自治会・町内会） 現在の行政の地域対応は、自治会・町内会への対応が中心であるが、自治会・町内会と一口に言っても、その規模や活動は地域によって様々である。そうした中で、会費、規模、運営、役員の任期とリーダーシップなど、いろいろな面で課題があるが、地域の実情は様々なので、一般論として「こうすべきだ」ということは言えない。行政としては、現状の対応は地区連合町内会長との接触が中心になっており、地域の実情が十分に把握できていないという問題がある。

・地域組織（各種団体）（ここでは、体育指導委員、青少年指導員、子供会、老人クラブを例としてとりあげ

た。各種団体は、いわゆる「タテ割り行政」とタテ割りすることが不可能な「地域」との接点と考えられ、両者のかかわり方の問題が、色濃くあらわれてくる。活動費の不足、市区の行事への協力負担の重さといった課題は、それを端的に示したものと見えよう。

・地域組織（自主活動） 地域住民が自主的にを行っている活動を自主活動と呼ぶ。自主活動の数は多く、活動内容も千差万別である。そのあり方を見ると、各地域の特徴、とりわけその地域における自発性のあり方が、強く反映されている。行政としては、自治会・町内会への対応とタテ割りのな各種団体への対応だけでは不十分であり、こうした自主活動も含めて、地域の自発性に着目していく必要がある。また、施設や情報などの面で、一般的な条件整備が重要である。

・地域施設 自治会・町内会館は多くの地域で整備されているが、その創設の事情や現在の利用状況は、地域によって様々である。地区センタ

ー、青少年の家、学校開放などは、いずれも各地域の歴史的経過や活動の積み重ねの上に、その施設の場所や利用可能時間帯など住民にとっての「使い勝手」を考慮して様々な活用されている。施設の絶対数が不足していると考えられるが、地域によって様々な事情に目を向けずに画一的な施策を進めていくことは問題がある。

・地域情報 地域でつくり、地域へ提供している情報がある。これらミニコミや会報、記念誌の類いは行政が地域を知る手段として貴重であるが、その把握は部分的にしかできていない。今後、このような情報や「人」の交流が重要な課題となる。また、広報・広聴ルートについても地域の実情をより正しく反映できるように改善・充実すべきである。

### ● 第四部では

第二部、第三部の記述から「地域」の構造をさぐってみた。そして地域の活力、問題解決力の原点として「重層的構造」に着目した。「ま

ち1986」を地域に関する理論の書として読むなら、第四部は、その核心をなす部分である。

#### 【要旨】

第二部、第三部から読みとれる地域の構造は「様々なあり方を見せる自発性を軸にして、多様な組織・活動、施設や情報が重層的な構造をなしている」——つまり「多様な活動が、施設・情報などの面を含めてかなり動的な形で互いに関連性や重なりを持つている構造」と言うことができる。都市化された社会では、個人にとって地域の枠組そのものが多様で重層的であると同時に、各々の生活課題も多様化している。地域で生活する人々は、重層的構造を巧みに使いわけることによって、様々な生活課題をこなしている。こうした使いわけが可能な重層的構造のあり方こそが、地域の活力、問題解決力の核心である。そして、地域の活性化のためには、個々の活動エネルギーが自由に発揮できる構造が必要であり、そうした活力を呼び出すために①個々の地域活動が、それぞ

れ活発に行われていること。②多様な活動があつて、重層性をなしていること。言いかえれば、重層性の幅がひろく、ある程度の厚みを持っていること。③各活動の交流があつて情報の風通しがよいこと。その情報が役員にとどまらず、個々の住民まで届くこと。④全体として開放性があつて、参加のチャンスが多いこと

——が、重層的構造の大切なポイントになる。

・組織・運営 様々なグループ・団体間で相互に連携をとつて活動を進めるのが地域の活性化のポイントである。会員同士の人的な交流や重なりが、連携を進めていく基礎になる。

・施設・情報 施設や情報を媒介に交流が行われ、施設が情報センターの役割を果たせば、情報の共有がはかられ、新たな活動や活力につながるだろう。

## ●第Ⅴ部では

大岡川クリーンフェスティバルの事例をあげながら、地域活性化のための行政施策のあり方、行政がとる

べきスタンスを提示した。報告書全体の結論部としては、いささか舌足らずの感があるが、「単に言葉の上だけで安易な結論を出したくはない」という研究会・作業部会の考えを読みとっていただければ幸いである。

### 【要旨】

港南区上大岡で、地域住民が自ら川に降りてゴミを集めるといふ

「大岡川クリーンフェスティバル」

が実施された。これは「自然を生かした街づくりを」という地元の発案から、上大岡再開発協議会を軸にして、地元自治会・町内会、商店会、子供会、港南地区連合町内会、よこはまかわを考へる会、市大の学生グループなどが重層的構造を生かして実施にこぎつけたものである。一方地元からこのような前代未聞の提案を出され、協力を依頼された行政側は、問題がいくつものセクションにかかわり、本来対応すべきセクションも特定できないため、当初は管轄など「ナワバリ意識」にとらわれたタテ割りの議論をくりかえした

が、やがて、協力しあう体制に変わっていった。それは、地域の人たちとともに現場で苦勞する中で、行政が地域から学んだ結果でもあつた。

・地域を知る 地域のあり方を知るといふことは、一面だけから見ることではない。地域の様々な側面とその重なり方—すなわち重層的構造を理解すること、そして、そのあり方に学ぶことが大切である。そのため

には、重層的構造を「わかりにくいゴチャゴチャしたもの」として排除

することなく、まず目を向けてみることに、そのゴチャゴチャしたわかりにくさとつきあつてみようという姿勢で、地域の人々とともに現場で苦勞することが必要である。

・地域担当制と総合調整機能 地域から学ぶために、行政は常に地域に目を向け、地域と連絡をとりあえることが必要である。そのためには、区役所の地域対応の現場での地域担当制が望まれるとともに、それを施策に生かすため、区役所の総合調整機能

が改めて問われることになる。つまり、行政のタテ割りの構造を、

いかに現場の区が地域からの発想で生かしているか、ということが問われている。行政の基本としては、地域のあり方が多様であることをキチンとふまえずに画一的施策を行つても地域の活性化は図れないし、今、地域には、画一的な施策では対応しきれない多様なエネルギーがふれていることを知ることである。

## ●第Ⅵ部では

五十八、五十九、六十年度に実施した地域社会に関する調査の結果を集計した。

◇「まち1986」から言え

2011

1 地域は活発に活動している

住民は、様々な生活課題に対して、組織や施設などを工夫しながら使い、活発に活動していることがわかった。わずか五地域の中でもこのことが言える。

2 しかし、活動は一律ではない

同じ名称の団体であっても(例えば自治会・町内会)活動内容は同じではない。その地域の歴史・環境などにより違いがあり、工夫が見られる。

3 「地域」の枠は柔軟性を持っている

活動範囲は、あるときは自治会・町内会の中であったり、あるときは小学校通学区域であったり、またあるときはまったく別のものであったりして、柔軟性がある。

4 行政はもっと地域を知るべきである

地域に入り、地域から多くのことを学んだが、一番痛切に感じたのは、市職員が地域の実態をあまりにも知らないということであった。地域を知らなければ、全市一律の施策は出てこないのではないか。

5 今後、あちこちで取り組んでほしい

わずか五地区の中からだけでも多くのことが学べた。今後、様々なセッションで、地域を知り、学び、行政に生かされることを願っている。

### ◇「まち1986」とは何だったのか

我々、作業部会のメンバーにとつて「まち1986」とは、様々な形で地域と出会い、とまどい、考えさせられたこの三年間の日々の記録にほかならない。今読み返してみれば、不満な点は数多い。しかし、そうした点についてよく考えてみると、行政と地域とが抱えている問題をかなりストレートに反映した部分が大半であり、改めて考えさせられる。そのことを中心に「まち1986」とは何だったのか、もう一度考えてみたい。

話を第Ⅱ部と第Ⅲ部にしぼろう。第Ⅱ部の記述の豊饒さは、どこから来ているのだろうか。第Ⅱ部において我々は、ひとりが一地域を担当し、地域に入って取材をし、原稿を執筆した。取材の方法も表現する文体も、各地域の特色と担当者の個性にまかされた。統一したスタイルで表現した方が比較しやすい、という考えもある

したが、あえてスタイルを統一させることは避けた。その結果が、あの豊饒さになった。まだまだ不満はあるが、地域担当制によって地域の姿を生き生きととらえることができると、ということを具体的に示した記述になりしていると自負している。

それに対して、第Ⅲ部の執筆は、項目ごとに「タテ割り」で分担した。その結果生じてきた第Ⅱ部と第Ⅲ部との落差は、現在の行政が抱えている問題を、かなり生々しく見せている。端的に言って第Ⅲ部は、それぞれ項目が詳細に書きこまれていくわりに面白くない。と言うよりも、詳細に書きこまれていけばいほど面白くない。そこに描かれた地域も、第Ⅱ部で見たほど魅力的に見えない。第Ⅱ部では、記述が詳細であればあるほど、その地域が魅力的なものに見えてきたと言うのに……

これは、タテ割り行政の問題点を、ある意味で象徴的に露呈してしまった姿ではないだろうか。第Ⅲ部の各々の項目の記述は決して貧弱ではない。しかし、それを全体として見わたるとき、そこにパランスのとれた地域連帯の方向性も、活力ある地域の姿も、まったく浮かびあがってこないのだ。

地域ごとにヨコのつながりを重視して執筆した第Ⅱ部の豊饒さと対照的に、タテ割りで執筆した第Ⅲ部のつまらなさ——これは、今後、行政と地域とが互いに育てていくべき関連性を示唆しているように思えてならない。

あえて結果論として言えば、地域社会研究会が「まち1986」のためにやってきたことは、「地域担当制」の本来あるべき姿に向けての実験だったのだ。そこでは、おそらく本市において初めて、行政側の都合によってでなく——というよりもあえて行政側の都合は無視して——純粹に地域を理解するために地域担当制が採用された。その結果の報告である、ということが「まち1986」のもっとも大きな意義なのだ。

したがって第Ⅱ部は、量的にだけでなく、質的に見ても「まち1986」のもっとも重要なパートである

調査季報90—86.9

る。第Ⅰ部は第Ⅱ部へ向けての序論として、そして第Ⅳ部・第Ⅴ部は、第Ⅱ部から導かれる結論として読まれることによって、初めてその本来の意義が理解されるだろう。

「まち1986」あるいはこのダイジェストを読んで「斬新ですばらしい内容だ」とか「言い古されたような当たり前なことばかりだ」とか「ま

ちがいだらけでとても賛成できない」とか、「何を言ってるのかよくわからない」とか、「いろいろな感想を持たれると思う。それは各々の感想としてとても貴重であるが、いずれにしても、これは地域社会研究会が地域担当制を採用して、ひとりひとりが実際に地域に入って調べてみた結果として書かれているのだ、とい

うことを考えてほしい。そしてできればみなさんが、どうか具体的な地域と触れあってみて、そうした感想をひとつひとつ検証してほしいと思う。

地域に入っていく、という試みのためのヒントは、「まち1986」のあちこちに、たくさんころがっている。我々、作業部会のメンバーは

「まち1986」をつくるという作業を通じて、初めて本来の意味で地域と出会ったのだし、「まち1986」には、こうした過程が正直に書かれているからだ。

△地域社会研究会作業部会／村田和義  
Ⅱ港南区区政部政推進課区民相談室、加藤勝彦  
Ⅱ企画財政局都市科学研究室Ⅴ